

芽吹く里山

市川茂子

風はやも春の気配にかわりつつ街の彼方に夕焼赤し

帰るなき生れし地なれどはるかにて芽吹く里山夢に出でくる

年古りて昨日のごとくに浮かびきて幼に還る四季の里山

災害に登山電車は横たわり箱根路の旅バスにて巡る

との曇る早春の山かすかにも芽吹きのみざし風の音きく

山峡にせせらぎの音聞こえきて覗く水面に鳴一羽立つ

大輪に白の色さす八重椿 鉢より出でて地に一つ咲く

街路樹の根元うずめてとりどりにつつじ咲きつぐ街の静もり

総会の議案書とどき「コロナ」にて委任状一通送りて終る

ウイルスの感染気にし帰り来て空気清浄機のスイッチを押す